

沖縄基地の問題！

それは、日本の国民すべての問題であり、
国民一人一人が＜軍事力＞にどう向き合うか
という問題ではないでしょうか。

「日本国憲法」は世界の他の国のものと違い、自国の人々と 他国の人々との血を流して書き上げられたものです。

この点で日本の憲法は世界無類の作品だと言わなくてはなりません。「戦争の放棄」ということも敗戦国として他から無理やりに押しつけられたもの、いやいやながら条文化したものと考えられないこともないが、実際にいうと、これは第一次及び第二次の世界大戦に参加した国々の人々が、実際に戦時中、言語に絶した苦しみ、惨めさを体験した、その心理の結晶と論理の帰結とにほかならないのです。

それ故に、この点に関しては、「日本国憲法」のなかのこの条項（「戦争の放棄」）は、実に世界的意味をもって、最も大切なものと認めなくてはならないのです。

『日本の霊性化』鈴木 大拙 著 より

先の大戦の開戦後、日本は徴兵軍人だけでは戦地軍力が足りなくなり、学徒出陣、国家総動員と戦争をますます国全体のものとしていった。

その中、某大学での学徒出陣壮行会で挨拶に立った鈴木 大拙師（当時の仏教会ではとても有名な宗教者）の言葉、

「本当に惜しいことである。いったい、なんの理由があつてアメリカの青年と日本の青年が殺し合わねばならぬのだ。こんなバカげた戦争がいつまで続くのか。わしは、この戦争で日本が勝つのかアメリカが勝つのか、そんなことは知らん。しかし、この戦争はいつの日にか必ず終わる。終わった後の新しい時代と世界を築くのは、まさに、若き諸君の仕事だ。故に、諸君はこの戦争で決して死んではならない。捕虜になつてよいから生きて還つてこなければならぬ（要旨）」

大学内に常駐していた配属将校が、話をやめさせようと、その 佩刀ほうちうで講壇を下からバンバンと打つのをまったく意に介せず語り続けられたというこの言葉を、今日あらためて心に刻みたい。

沖縄の人たちは知っている

アメリカの海兵隊が日本の平和の抑止力でないことを。

五月十六日一万七千人が手と手をつないで

米軍基地の周囲約十三キロを人間の鎖で包囲した。

大雨注意報がでた土砂降りにずぶぬれになりながら、シュ

プレヒコールと「沖縄を返せ」のうたを響かせた。

独立国日本の中に首都東京をはじめ百を超える外国（米軍）

の基地がある異常さ。

米軍海兵隊はアメリカに二部隊、アメリカ以外では日本に

一部隊が配備されている。

沖縄の海兵隊は年間約半分を沖縄を離れ、イラクやアフガ

ニスタンへの出撃、外国での軍事演習にあてている。

これが日本を守る抑止力といえるでしょうか。

沖縄の人たちは知っている。

これは抑止力などではなく平和を脅かす危険な存在だと。

平和

アメリカ（キリスト教）と

アルカイダ（イスラム教）の

戦闘が長期化し、拡大し、

世界中に広がる中、

一番心を痛めているのは、

イエス・キリストと

アラールの神ではないだろうか。